

句集 木守柿

伊野部 敦子

つくばいの 笥も青し 冬構

冬灯 夜話をして 去りにけり

和が家に 我が椅子のあり 梅の晝ひる

菜の花や 岸の彼方の かがやけり

大空を 独り占めして 鯉幟

百花苑 百の家族や 子供の日

里帰り 冷し西瓜や みな昼寝

目光の 空揚げ盛るや 織部皿

逝き給う 白寿の翁 花の雨

おうな

うすもの  
羅の 仕舞を舞うも

ひとりかな

秋兆す 訣れのあとの 椅子たたむ

今日生きしあかしのしかと 櫻散る

父の忌の 櫻吹雪を 往きかえる

明日は明日 菖蒲湯に 眼をつむりけり

たどり来し 起伏の道や 春の雨

忘れたく 時計をはずす 花の冷

紫陽花の 千の下ゆく 堰せきの水

疎閑家の 眠られぬ夜の 遠蛙

シヤガールの 青にぬれつつ 夏館

房ごとに 風を選びぬ 百日紅

芸の道 ただ一筋に 単帯

三世代 願の系の それぞれに

水底の ごとき空あり 半夏生

岬への坂道続く 弱雲

ふりむかず 生きて行きたし 雲の峰

あけ  
明易し 門前にはや

曜市が

青桐の 木陰は広し 関所あと

亡き姑ははの 年ともなりぬ 門火焚く

メルヘンの 秋の館を訪ねけり

野地菊や 野点ののてまえ 進みつつ

秋蒔きの  
種子選びいる  
母の背な

蓮の葉に  
押されて蕾  
また動く

静かなる  
月日の庭や  
萩の花

ふつふつと  
白粥炊きぬ  
秋あきついで徴雨

客として 息子の家に居り 秋扇

秋茄子の 手に染む色を 漬けにけり

朝方に 夜具かけやるや そぞろ寒む

消息を 聞くゆで粟を 食べながら

秋日和 ただカルストに 惚ほうけたり

竝びたつ 秋峯の中 寡黙たり

秋高し 村営バスに 一人座し

木守柿 子に伝えたき 事おとし

